

# 蔣介石『中國之命運』の國際的反響

森  
川  
裕  
貫

はじめに

一 『中國之命運』の刊行

二 宣傳の展開と英語版刊行の準備

三 國內外の憂慮と批判

(一) 中國共產黨による批判

(二) 中國國民黨内部の深刻な憂慮

(三) イギリス當局の反應

(四) アメリカ當局の反應

四 増訂版の刊行

五 英語版刊行をめぐる問題

(一) 抗日戰終結直後における『中國之命運』の位置

(二) 二つの英語版

(三) マクミラン版の特徴

(四) ロイ版刊行の中心人物

(五) ロイ版の特徴

(六) 書評の出現

おわりに

## はじめに

一九四三年三月に刊行された蒋介石『中國之命運』は、中國の指導者の著作として重視され、その内容や意義が大いに宣傳された。その一方で、蒋介石を批判する側からは、同書の「封建的」「專制的」性格が問題視され、中國におけるファシズムを體現しているとの揶揄の聲も上がった。

肯定的にせよ否定的にせよ、『中國之命運』は中國の指導者による著作ということで大きな反響を巻き起こしたのだと言える。そのため、その反響がいかなるものであったのかについて、これまで研究がなされてきた。それらの研究のなかでも特に参照すべきは、王震邦によるものである。王震邦は多くの史料を涉獵し、中國國內、とりわけ中國國民黨に聯なる人士が『中國之命運』に對していかなる反應を示したのかについて、詳細を明らかにした。<sup>1)</sup>

ただし、王震邦の研究が明らかにしていない點もいくつか残されている。特に指摘すべきは、『中國之命運』が巻き起こした國際的反響について、十分な言及がない點である。『中國之命運』は中國國外でも大きな注目を集めており、この點の考察も同書の反響を理解する上で不可缺である。<sup>2)</sup> 具體的には、中國の同盟國であったイギリスとアメリカが『中國之命運』刊行時にどのような反應を示していたのか、一九四七年に刊行された二冊の英語版がどのような反應を巻き起こしたのか、の二點に本稿では着目し、考察を進めることとしたい。<sup>3)</sup>

なお、英米の反應、および二つの英語版の反響については説明するためには、中國國內での反響についても一定の説明が必要である。本稿では先行研究も参照しつつ、この點をまず説明することとしたい。

## 一 『中國之命運』の刊行

『中國之命運』が刊行された時期、蒋介石は臨時の首都である重慶に據りつつ、日本との戦争の指揮に奔走していた。

本来であれば、蒋介石は國內の總力を擧げて日本との戦いに集中したはずだが、それは許されない状況であった。まず、敵對關係にあつた中國共產黨とは、西安事件を経て協力關係を樹立していたとはいえ、國共兩黨の間には依然として厳しい緊張關係が存在していた。また、足下の中國國民黨に對する統制も、盤石の固きからはほど遠い状況にあつた。汪精衛の政權が蒋介石に對抗するかたちで南京に成立していたし、蒋介石に反抗的な實力者も少なくなかつた。國民黨の内に外にも敵を抱えるという苦境のなかで、蒋介石は日本との戦いを強いられていたのである。

この苦境のなか、明るい話題であつたのは、一九四三年一月、英米兩國との間で、治外法權の撤廢が實現したことである。つとに實現していた關稅自主權の回復と合わせて、中國にとり長年の懸案であつた不平等條約撤廢の道筋をつけることができたのであり、これは蒋介石にとって大きな喜びであつた。

この中國にとつての慶事が、『中國之命運』の刊行を後押ししたことは間違いない。一九四二年一〇月、英米兩國との間で治外法權撤廢の實現が確實であるとの知らせを受けた蒋介石は大きな昂揚感を覺えた。そしてこの外交での勝利を國內にも轉用する、すなわち國內の統治を固め國民を戰爭に動員する、さらにそのための前提として國民の道德を涵養することを思い立つた。その具體的方途の一つが、自らの考えを詳述する著作の準備であり、一〇月末には『國民革命風』と題する著作の準備に着手している。この著作が名稱を變え、『中國之命運』として刊行されることになつたのだ<sup>(4)</sup>。

刊行日としては、三月一二日が選ばれた。これには、明確な理由が存在していた。<sup>(5)</sup>一つは三月一二日が國父として尊崇される孫文が逝去した國民黨にとつて重要な記念日で、この日に『中國之命運』を刊行することは孫文の後繼者としての蒋介石を宣揚する上で大きな意味をもつたからである。もう一つは一九三九年のこの日に、國民精神總動員と呼ばれる運動が發動されていたことに關わる。國民精神總動員とは、抗日戰爭を戦い抜き救國を實現するため、國民の道德を高めようと展開された運動であつた。<sup>(6)</sup>この運動が四周年を迎えるに当たり、それを効果的に進めるための強力な手段として、『中國之命運』の刊行が企圖されたのである。<sup>(7)</sup>

『中國之命運』はのちには多くの出版社・出版機構から刊行されることとなったが、当初刊行を擔ったのは正中書局である。正中書局は一九三一年に南京で設立された。設立を主導した陳立夫はC・C系の指導者として特務機關を掌握するのみならず、抗戦時期の教育・文化政策にも強い影響力を行使したことで知られる。<sup>8)</sup>『中國之命運』刊行當時、陳立夫は教育部長を務めており、その影響下にある正中書局が國民黨、特にその教育・文化政策と密接な關係を有していたであろうことは容易に推測される。<sup>9)</sup>

この正中書局から刊行された『中國之命運』は、全八章二二三頁から構成され、価格は五元であった。内容をごく簡単に紹介すると、次の通りである。

中國は五千年の昔から發展を遂げ繁榮を誇ってきたが、アヘン戦争の敗北以降に結ばれた不平等條約によって衰退に追い込まれた。その立て直しに奔走したのが、孫文そして中國國民黨であり、その盡力により不平等條約撤廢にまでこぎつけることができた。今後は孫文の示した見取り圖に従い、國民黨・三民主義青年團が中核となって中國のさらなる發展に邁進していかねばならない。そのようにして發展した中國には、民族の自由と國家平等の原則に基づき世界平和にも貢献していくことが求められる。<sup>10)</sup>

なお、本書全體に占める紙幅はわずかだが、第三章第五節「不平等條約の心理に對する影響」では、自由主義すなわち英米の思想と、共產主義すなわちソヴィエト・ロシアの思想とが、一九一九年の五四以降、中國で流行を見せたことに對して不満が表明されている。蔣介石はこの二つの主義を奉じる中國の人士の言論が、「中國の經濟や民生にとり切實なものではなく、中國固有の文化精神に違背してしまっている。〔そうした言論を唱える〕中國の人士は自分が中國人であるということを忘れ、中國のために學び中國のために用いるということも忘れてしまっている」と批判し、<sup>11)</sup>さらに自由主義と共產主義とに對しても懷疑的な姿勢を示している。後述するように、ここに見られる自由主義への疑念は本書の讀者に大きな懸念を抱かせることになったのだった。

## 二 宣傳の展開と英語版刊行の準備

『中國之命運』に關しては、中國國民黨機關紙『中央日報』が、連日精力的な報道を行っている。『中央日報』は刊行に先立ち、「總裁（蔣介石）は政務多忙ななか、自ら十萬字に及ぶ大著を執筆した。世界戦争の形勢が急轉している時期に、中國全土の同胞に（この大著を）提示するのは、同胞のために一つの正確な指針を創造し、光り輝く燈臺を建設するようなものである」との評價を與えて、『中國之命運』にいち早く言及している。<sup>(12)</sup> 詳細な内容はまだ明らかではないにもかかわらず、その刊行を盛り上げようとしていることがうかがわれる。

その後、『中國之命運』が實際に刊行されると、その内容を紹介しつつ、「中國の志ある人士よ！中國の熱血青年よ！『中國之命運』というこの大著を讀みたまえ！そして讀み終えたらただちに一致共同して中國の命運を切り開くのだ！」<sup>(13)</sup> との呼びかけを行ったり、重慶市内や各地で同書が話題の中心となり歓迎されている様子を積極的に報道している。<sup>(14)</sup> なお、この場合の各地とは、國民黨統治區域はもちろんのこと日本軍の占領地域も含まれており、日本軍占領地域である廣州では、『中國之命運』の價格が一〇〇倍以上に高騰しているとも伝えられている。<sup>(15)</sup> 以上の報道は事實を反映している部分もあるが、多分に宣傳的要素を含んでいると考えるべきであろう。それは領袖である蔣介石の著作を熱心に宣揚し、その權威を高めようという意圖に支えられてのことであつた。

同様の宣傳は中國國民黨機關誌『中央週刊』にも見られ、「私たちは總裁が一冊の大著を著わし私たちに中國革命・建國の道筋を示してくれるよう期待していたが、この期待はいまや現實のものとなつた」、「『中國之命運』を著わした」總裁の文徳武功は永遠に光り輝き、抗戰建國における總裁の功績は往古を超越している、<sup>(16)</sup> 「この著作は我が中國の建國に際して尊重すべき指針であり、また世界の永久平和を築く橋渡しともなる。この偉大な著述は非常に含蓄に富んでおり、少し研究してみるだけでも限りのない奥深さを得られるだろう」といった美辭麗句に満ちた文章が、<sup>(17)</sup> 『中央週刊』に多數掲

載された。また『中央週刊』に掲載された文章がほかの雑誌にも轉載され、より多くの読者の目に觸れるよう企圖されてもいた。さらに、それらの文章を集めて一冊の書籍として刊行するというも行われている。<sup>18)</sup>

加えて『中國之命運』は、大學以下の各學校の教材としても使用するよう義務づけられた。各學校は『中國之命運』を購入の上、校長や訓導を擔當する人員が學生に對して講話を行い、學生の積極的讀解と心身の鍛鍊に役立てることを求められたのである。<sup>19)</sup> なおこうした措置は、教育現場で『中國之命運』を活用するよう蔣介石自ら陳立夫に求めたことから實現したものであろう。<sup>20)</sup>

この要請を受けて、教育の現場では『中國之命運』が買いそろえられ、校長が教職員・學生を集めて解説を行っていたようである。また學校に置かれた三民主義青年團分團部を通じ、『中國之命運』に關する試験を行い、優秀者には賞金を與えることもなされていた。<sup>21)</sup>

そして、主としてそうした學校教育の補助のために、『中國之命運』に關する解説書も複数刊行されている。その一つである『中國之命運』研究大綱參考書目（一九四三年六月）は、「『中國之命運』的基本概念與觀點」、「『中國之命運』各章提要」、「『中國之命運』研究大綱」、「『中國之命運』參考書目」、「『中國之命運』引用人名生卒表」という内容から構成されており、實際に『中國之命運』を教えなければならぬ教員にとり、一種の種本として機能したと思われる。なお、『中國之命運』研究大綱參考書目』は正中書局から刊行されているので、國民黨の意向を強く反映して編まれたものであろう。

このほか『中國之命運』を廣く流通させるために、國民黨中央宣傳部は特別の措置を講じていた。それは『中國之命運』の版權の開放であり、紙型の提供を行う用意も表明された。これにより、各機關が『中國之命運』の印刷・刊行を實施することが可能となった。<sup>22)</sup> さらに『中國之命運』が流通していない地域のために、まずは新聞・雑誌に『中國之命運』の内容を轉載し紹介するという工夫もなされていた。<sup>23)</sup>

新聞・雑誌による宣傳、教育現場での活用<sup>(25)</sup>、關聯書籍の刊行、中央宣傳部の特別措置といったことよって、『中國之命運』は一説によると五月までに一三〇萬部を賣り上げた<sup>(26)</sup>とされる。

國內での爆發的流通に満足することなく、蔣介石の目は『中國之命運』を中國語のみならずそのほかの言語でも発信し、自らの考えを中國内部の各民族そして世界各國に廣めることにも向いていた。實際に「英、佛、獨、ソ聯、アラビヤ、印度、タイ國、馬〔マレー〕、日、西〔スペイン〕、伊、朝鮮の各國語を含む一四ヶ國語」での翻譯・刊行という壯大な計劃が提起されていた<sup>(27)</sup>。そのなかでも特に重視されていたのが英語での刊行であり、中國語版の正式刊行前に英語版の翻譯がすでに進行し校正の段階に入っていることが伝えられている<sup>(28)</sup>。また英語版が四、五月には刊行されることも、中央宣傳部國際宣傳處により發表されていた<sup>(29)</sup>。さらに宋美齡の訪米に同行していた中央宣傳部副部長董顯光が、英語版刊行に關する契約をアメリカの出版社と濟ませたとともに伝えられ、英語版刊行の準備は本格的に進められていた<sup>(30)</sup>。

英文翻譯の任に當つたのは、中國國民黨國防最高委員會祕書長の職にあつた王寵惠である。王寵惠は國務總理や外交部長を務めるなど國內的にはもちろん、國際司法裁判所判事を務めた經歷から國際的にも知られる存在であつた。その高度な英語力に對する期待ばかりではなく、國際的名士といふべき王寵惠の名を利用することで、『中國之命運』への評價を高めたいとの計算が、ここには當然働いていたことであろう。

王寵惠を補佐した浦薛鳳によると、實際の翻譯作業は外交部および中央宣傳部國際宣傳處の中級幹部たちのなかから英語に長けた複數の人材が初譯をまず作成、その後溫源寧、吳經熊、全增嘏、林同濟らいづれも英米への留學經驗を有する四名が複譯を作成し、最終的に王寵惠自らが點檢を行うという方式で進めることとなつた。しかし、古典の引用や八股式の文章の翻譯が容易ではなかつたことに加えて、初譯の水準が低すぎたり、複譯擔當者の一部が必ずしも盡力しなかつたといった問題があり、完成までに多くの苦勞があつたようである<sup>(31)</sup>。

大變な手間暇をかけて完成した英語版は、しかし豫定を過ぎても刊行されることがなかつた。それは中國語版『中國之

命運』が、表面的な絶賛・歓迎の裏で大きな反撥を招いたためであった。

### 三 国内外の憂慮と批判

#### (一) 中國共產黨による批判

そうした反撥のなかでまず擧げるべきは、中國共產黨によるものである。中國共產黨機關紙『解放日報』には、一九四三年七月以降、『中國之命運』に對する複数の批判記事が掲載されている。<sup>(32)</sup>

批判記事を執筆した一人である陳伯達によると、『中國之命運』は刊行後まもなく、延安の毛澤東の手元に入っており、それを讀んだ毛澤東は陳らに向かつて、「どうやら、蒋介石は君たちに題目を提示してくれたようだ」と述べたという。<sup>(34)</sup> この言葉に動かされて、陳伯達らは批判記事の執筆に着手した。

これらの批判のなかでも最も有名なのが、陳伯達「評『中國之命運』」（『解放日報』一九四三年七月二日）である。この文章には毛澤東も多大な關心を寄せていたようで、陳伯達による草稿ができあがると毛澤東が内容を仔細に點檢し、一部修正をした上で『解放日報』への掲載がなされた。<sup>(33)</sup>

陳伯達「評『中國之命運』」は、『中國之命運』への多岐にわたる批判から構成される。たとえば陳伯達は、中國の抱える多くの問題を不平等條約がもたらしたかのように蒋介石が説明している點について、あまりにも偏った見方であると疑問を呈している。また、國民黨の發展・成長や北伐の成功のなかで、共產黨が果たした役割を正當に評價していない、あるいはそれにそもそも言及しない點に大きな不満を表明している。さらに蒋介石が共產黨打倒のために中山艦事件を捏造したと批判しつつ、それは國會議事堂炎上をドイツ共產黨による仕業として演出したヒトラーと同じやり方だとこき下ろし、これに關聯して蒋介石の共產黨に對する彈壓の殘忍さは、ヒトラー、ムッソリーニ、東條英機と何ら變わりはなく場



合によつてはそれをも超えると論難している。以上の點から陳伯達は『中國之命運』に對し、「一言で述べれば、自由主義と共產主義に反對し、實際には買辦的にして封建的なファシズム、あるいは新しい専制主義（とはいえ、形式上は「三民主義」という帽子をかぶつてはいるが）を主張しているものであり、だから人々を大いに失望させたのだ」との辛辣な評價を下した。<sup>(36)</sup>

このほか「評『中國之命運』」において興味深いのは、冒頭部分において、『中國之命運』の校正を擔當したのが陶希聖であること、彼が漢奸汪精衛に協力した過去をもち、現在もなおファシズムを鼓吹しているとの辛辣な批判がなされていることである。<sup>(37)</sup>

中國の歴史を社會史や政治思想史の觀點から研究し、多數の著作を發表していた陶希聖は現實の政治にも深く關與しており、一九三八年一二月、汪精衛とともに重慶を脱出、日本との和平工作に従事するようになった。しかし、程なくしてその職務に嫌氣がさしたようで、一九四〇年一月、香港に逃れ、さらには再び重慶に舞い戻っている。その後は侍從室第二處第五組組長として蒋介石に重用され、國民黨の言論政策にも關與するようになっていた。

だが、汪精衛幕下という經歷をもつ陶希聖は、陳伯達からすれば格好の標的であつた。こうした人物の關與により『中國之命運』が完成したと明記し、同書が問題を多く含んでいるのだと周知させることを陳伯達は狙っていたのだろう。實際、『中國之命運』への批判がなされる際、陶希聖と結びつけて語られることがあつたが、それは陳伯達の功績によるどころ大であつたと言えよう。

また毛澤東も「評『中國之命運』」を重視し、それが十分な影響力を發揮できるよう強力に後押しした。「評『中國之命運』」を、その發表後ただちに獨立したパンフレットとして整理・配布・販賣すること、その對象は日本軍の占領地域や國民黨軍にも及ぶこと、英文でも刊行し國外にも紹介すること、さらに一部の地域では、學校の必修テキストとするよう指示が出されたのである。<sup>(38)</sup> なお、英語版に關しては、一九四四年一月、アメリカ共產黨の機關誌『The Communist』に、同

黨のリーダーであるブラウダー (Earl Browder) の紹介文とともに掲載されており、毛澤東の指示は確かに實現をみている。<sup>(39)</sup> こうした措置により、中國共產黨は『中國之命運』を國內外で批判する體制を整えたのだった。<sup>(40)</sup>

## (二) 中國國民黨内部の深刻な憂慮

協力關係を樹立していたとはいえ、國民黨・蔣介石とかつて死闘を繰り広げていた共產黨から、『中國之命運』に對して厳しい批判がなされるのは當然といえ、英語版刊行に影響を與えるはずもない。それにもかかわらず英語版刊行が頓挫したのは、國民黨内部に『中國之命運』に對する強い懸念が存在していたためである。

一九三九年から一九四二年まで中央宣傳部部長を、一九四三年には國民政府中央設計局秘書長や國民參政會秘書長を務めていた王世杰は、「今晚、蔣先生は『中國之命運』英譯の件について意見を求めた。私はこの本が友邦の人士に對して刺激するところが多いと深く憂慮し、英譯するのであれば意譯によって外國人を刺激する語句をすべて削除するべきだと強く述べた。同書の趣旨は、國內の青年の閱讀に供することにあり、元々國外向けではないからである」と日記に記している。<sup>(41)</sup> 王世杰の危惧は彼單獨のものではなく、王の相談にあずかっていた、王寵惠、何應欽 (國民政府軍事委員會參謀總長)、吳鐵城 (中國國民黨中央執行委員會祕書長)、朱家驊 (中國國民黨中央執行委員會調查統計局長) も『中國之命運』の英語譯について強い憂慮を示したという。<sup>(42)</sup> 彼らはいずれも蔣介石の信任が厚く、黨・政府の要職を占めていた人物である。だが、職責上、同盟國や國際情勢に配慮する必要のあった彼らから見ても、『中國之命運』中國語版はそのまま國外に紹介できるようなものではなかった。

また浦薛鳳は、『中國之命運』が中國の抱えてきた問題のすべての原因を不平等條約に歸するのは誤りであって、現在の刊行は見合わせるべきことを王寵惠に具申し、その同意を得ていた。<sup>(43)</sup> さらに浦薛鳳は、『中國之命運』が強い反撥を受けていた一例として、複数の中國人學生の經驗を傳えている。それによると、インドを經由して外國に向かう外國人は、

携行している書籍につき、インド政廳によつて本來は厳格な荷物検査を受けることとなっていた。しかし、あまりに煩瑣であるとして、中國人學生については書籍をひとまとめにして検査を受けるといふ簡便な形式で済ませることとなった。それにもかかわらず、インドを通過した學生たちが荷物を確認したところ、携行していた『中國之命運』は没收されて姿を消していたといふ。<sup>(44)</sup> イギリス當局によるとこれは事實ではなかったようだが、<sup>(45)</sup> こうした話がまことしやかに伝えられるほど『中國之命運』に對する憂慮は深刻だったのである。

さらに注目されるのは、蔣介石夫人の宋美齡すらもこの懸念を共有し、『中國之命運』の英譯刊行に反對していたといふ事實である。浦薛鳳によると宋美齡が英語版刊行を暫時見合わせるよう強く要請したことにより、英語版刊行はとりやめにいたつたようである。<sup>(46)</sup> 宋美齡は一九四二年から四三年にかけてアメリカを訪問し、抗日戰爭に奮闘する中國を支援するよう訴えていたが、そのような宋美齡にとつて、アメリカを刺激する内容に満ちた『中國之命運』刊行は、まったくもつて時宜を得ない餘計な仕儀だと捉えられていたのだろう。

### (三) イギリス當局の反應

『中國之命運』の刊行が明らかになると、在重慶のイギリス大使館と本國外務省との間で、その内容をめぐつて頻繁なやりとりがなされている。それによると、英語版は當初中央宣傳部とイギリス情報省が合同で刊行する計劃だつたようで、そのためにイギリス大使館は、中國語版のみならず、大使館スタッフが作成した英語版に基づき、『中國之命運』の内容を仔細に分析している。

在重慶のシーモア (Horace James Seymour) 大使以下、イギリス當局の『中國之命運』に對する分析結果は、總じて辛辣をきわめた。彼らの評價では、『中國之命運』は中國ナショナリズムを強く打ち出しつつ、不平等條約により中國が苦しめられたことのみを強調するものであつて、そのままでは容認できないものであつた。<sup>(47)</sup>

今日の視點からすると、不平等條約が中國に與えた損害についてほとんど考慮しないかのようなイギリスの態度は傲慢であるかもしれない。しかし、當時のイギリスの視點に立てば、ともに戦争を戦っている同盟國を糾弾する著作刊行を受け容れられないのは、きわめて當然のことだった。

興味深いのは、中央宣傳部駐英辦事處處長の地位にあった葉公超も、同様の見解を示していたことである。<sup>(48)</sup> 葉公超は『中國之命運』中國語版に目を通した上で、租界や帝國主義に關する記述に問題がありそれが中英協力の觀點から見て受け容れがたいこと、英語版刊行に當たつては中國語版の論調を弱める必要があるためそのための提案を行う旨をイギリス側との話し合いの場で表明していた。ただ彼は、その努力が成功するかどうかは保證できないとも同時に述べていた。葉公超は、王寵惠や王世杰らの懸念を完全に共有していたと言えよう。

結局、葉公超の努力は實を結ばなかつたようである。イギリス當局内部では、情報省が英語版に關與しなかつた場合、民間の出版社が勝手に刊行することへの警戒も存在してはいた。しかし、『中國之命運』の主題が多くのイギリス人讀者を獲得できるはずはなく、民間の出版社が刊行したところで商業的成功を收められないとの手厳しい意見が勝り、<sup>(49)</sup> イギリスで英語版を刊行するという事業は沙汰止みとなつたのだつた。

#### (四) アメリカ當局の反應

イギリス當局同様、アメリカ當局もまた『中國之命運』に非常な注意を拂つていた。在重慶大使館と國務省との間のやりとりのなかでは、イギリスから提供された翻譯も用いて『中國之命運』の内容が検討されており、大使館參事官のアチソン (George Atcheson, Jr.) によつて詳細な報告が作成されている。<sup>(50)</sup>

アチソンは『中國之命運』の實質的著者が陶希聖であると指摘した上で、陶希聖が蔣介石の信賴する助言者であること、陳果夫・陳立夫兄弟率いる C・C 系と親しい關係にあり、『中國之命運』が西洋の自由な思潮を疑問視し中國古代の價值

の再興を圖るC・C系の見解を反映しているとみなしている。アチソンによると、C・C系の介在、そして蒋介石が『中國之命運』を通じ自身を「聖人」や「英雄」として位置づけていると読み取れることから、中國の知識人のみならず、國民黨内部の人士の一部も非常な不満を感じている。特に自由主義的な知識人にとってはその程度は深刻であつて、『中國之命運』は、蒋介石が眞にファシストであることを示しているとの評價も見られるという。このように多くの批判を招いている『中國之命運』だが、三民主義青年團、中央訓練團、中央政治學校などを構成する大多数の人々は外の世界との接觸がないため、『中國之命運』が説く内容を盲目的に信じてしまつたらうとの豫想もアチソンは示している。

イギリス當局と比較して、中國國內の状況をより詳細に分析してなされたアチソンの評價は、蒋介石をして『中國之命運』に對しておよそ好意的・肯定的とは言えず、また王世杰らが示していた懸念を明確に示している。このような評價がなされていたアメリカで、『中國之命運』英語版を刊行するのはきわめて困難なことであつたらう。

#### 四 増訂版の刊行

國內外の様々な批判を惹起した『中國之命運』であるが、間を置かずして増訂版刊行の準備が開始され、一九四四年元旦、初版同様、正中書局から刊行がなされている。その直接的要因は、蒋介石が民族問題の記述に不満をもつなど初版修正の意圖を元々有していたためである<sup>31)</sup>。

増訂版では、民族問題に關する記述のほかにもいくつかの修正・加筆が施されている<sup>32)</sup>。そのなかでも、とりわけ大きな修正として、初版にはなかつた第三章第六節「國民の反省と自責」の追加がなされたことが挙げられる。

この節の冒頭で、『中國之命運』において不平等條約を招來してしまつた原因や不平等條約の害の激しいことをそれぞれ説明したのは、「我が國民の反省自責を希望する」ためだつたのだと蒋介石は述べている。不平等條約についてことさらに言及したのは、何よりも中國の人々の反省・自覺を促すためで、英米をはじめとする諸外國を批判するためではない

と辯解しているかのようである。さらに蔣介石は「我が國民が現在にいたつても深い自責の念をもつて反省できず、偏狭な國家主義者としていつまでも恨みを抱いて忘れず、また閉關自守時代の夜郎自大で頑固な思想を受け繼ぐならば、それは我が民族の立國精神の侮蔑唾棄するところであるのみならず、三民主義思想にも相容れないところである。だから我が國民は、この不平等條約取り消しのときにあたつて、慎重に自ら努力し、我が先哲のように過去にとらわれずかつての惡に拘泥することのない堂々たる大國の君子の風を保持し、各友邦と協力して世界改造と和平保持の責任を分擔しなければならぬ」とも述べ、<sup>(53)</sup> 不平等條約を押しつけてきた友邦の罪をこれ以上なじつてはならず、それらの國々とともに平和を目指すと述べることで友邦に強い配慮を示していた。

だが、蔣介石の著作であるにもかかわらず、増訂版に對する讀者の積極的反應を見いだすことは難しい。これは初版と異なつて、關聯する報道がほとんどなされなかつたことに起因する。

『中央日報』の場合、増訂版について直接報じた記事は、「蔣委員長が自ら執筆した『中國之命運』は、今年の三月一日の初版發行後、二百回以上の重版がなされている。蔣委員長による初版への若干の増訂を経て、來年元日に出版がなされる。同書は、やはり正中書局から發行される。重慶市では元旦より發賣され、そのほかの各地には現在印刷して輸送中であり、一月一〇日以前には發賣が可能である」という一點のみである。<sup>(54)</sup> 増訂版に關するきわめて簡単な紹介であり、また紙面での扱いも目立たないものであつて、初版刊行時の積極性はまったく感じられない。また、管見の限り、ほかの雑誌などで初版刊行時のような積極的な紹介がなされたわけでもない。<sup>(55)</sup>

このような状況をふまえると、増訂版を流通させることに、國民黨そして蔣介石はそれほど熱心ではなかつたのではないかとの疑念が生じる。實際のところ、増訂版刊行以降も、初版が依然として流通していたようである。たとえば、蔣介石直系の三民主義青年團においても、初版が使用され續けていた事例が見取れる。<sup>(56)</sup>

また、『中國之命運』研究大綱書目』は増訂版刊行後にも刊行されているが、増訂版ではなく依然として初版に基づい

て解説がなされている。正中書局の刊行物である以上、増訂版に對應した修正がただちになされてもよさそうだが、それがなされていない點に増訂版の重要性の低さが見て取れる。戦時の混乱により増訂版の印刷・流通が困難であった可能性も高いとはいえ、國民黨そして蒋介石の増訂版に對する扱いは冷淡であると言わざるを得ない。

後述するように、増訂版に基づく英語版であっても、英語圏の讀者の反撥を招くことになった。このことが示すように、増訂版における修正は外國への配慮という點では不十分だったのであり、『中國之命運』の内容を憂慮する國民黨の人士にとつてもそれは同様であつただろう。初版はもちろん増訂版であっても、國外を刺激するような大々的な宣傳活動は避けたいというのが彼らの本音だつたのではなからうか。

これに對し、蒋介石は初版に不満をもちそれを修正するために増訂版を刊行したのだから、より優れた内容となつていくはずの増訂版を大々的に宣傳してもよさそうである。だが、それをしなかつたのは時期の問題があつたのかもしれない。一九四三年一月に開かれたカイロ會談に出席しチャーチルそして特にローズヴェルトと精力的に會談を行った蒋介石は、東北、臺灣、澎湖諸島などの日本からの返還のみならず、中華民國が四大國の一つとして國際政治に參與することを承認された。<sup>(57)</sup>これは中華民國そして蒋介石の國際的威信を大いに高めたが、同時にアメリカやイギリスの立場にそれまで以上に配慮し、兩國に悪い印象を與えぬようにすることも求められただろう。そのため、蒋介石は『中國之命運』の宣傳に慎重な態度をとつたのではなからうか。

ただし、もう一つの要因も存在するかもしれない。それは修正したはずの増訂版にも、蒋介石が實は不満を抱いていたという可能性である。

陶希聖によると、初版の正式刊行以前、國民黨内の各人士に『中國之命運』の初稿を配布して意見を求めた際、最も批判が集中したのは不平等條約に關する記述であり、たとえば王寵惠は英米と協力して作戦を展開しているときに、不平等條約についてあげつらうべきではないと進言した。これに對し蒋介石は「あなたたち英米に留學した者は、英米を批判で

きないといふことを理解している。しかし、不平等條約の弊害について觸れないならば、我々が數年戦つてようやく得られた結果に言及できる價值があるといふのか。また不平等條約を撤廢したという優れた點も明らかにならないだろ<sup>(88)</sup>う」と切り返し、王寵惠らの批判を抑え込んだ。

また、やはり陶希聖によると、長老派教會の宣教師で蒋介石とも親交のあつたブライス (Francis Wilson Price (Frank D. Price)) は、初版の刊行後、蒋介石に對し國民黨と三民主義青年團について説明した第七章を削除するよう求め、さらには「外國の友人がみな望むのは、委員長が全國の領袖となることであつて、一黨の領袖であることではない」と進言した。これに對し蒋介石は、「國民黨の指導による革命抗戦がなければ、中華民國という國家も存在しない」と述べ不快感を示した。<sup>(89)</sup>以上の蒋介石の反應からは、彼が英米の立場に配慮して『中國之命運』の内容を修正することを潔しとしていなかったことが読み取れる。増訂版において第七章が削除されることはなかつたが、初版と比較して増訂版が英米の立場に配慮して修正されていることは否定できず、そのために増訂版の存在を大々的には表に出したくなかつたのかもしれない。

このことの一つの傍證として、臺灣での中に刊行された蔣總統言論彙編編輯委員會編『蔣總統言論彙編』(正中書局、一九五六年)に収録の『中國之命運』が、増訂版ではなく初版に準據していることが挙げられる。これは國民黨が主導して編んだ蒋介石の著作集に収録されたものであり、いわば臺灣における國民黨公認の版である。『蔣總統言論彙編』に増訂版ではなく初版が収録された理由は明確ではないが、英米への強い配慮のにじむ増訂版への準據を蒋介石が嫌つた可能性も考えられる。<sup>(90)</sup>

以上の諸事情から、増訂版刊行以降も、初版と増訂版のちがいが十分に意識されなのまま、初版が廣範に流通するといふ狀況が繼續していたのではなからうか。中國國內において、あるいは蒋介石にとつては、それで特に問題はなかつたのかもしれない。しかし、抗日戦後に新しい事態が出現し、『中國之命運』は再び大きな反響を巻き起こすことになった。



## 五 英語版刊行をめぐる問題

### (一) 抗日戦終結直後における『中國之命運』の位置

初版刊行時のような大々的キャンペーンこそ見られなかったものの、抗日戦終結後も『中國之命運』は引き続き重視されていた。蒋介石自身がはつきりとそれを求め、『中國之命運』を戦後中國の立て直しの指針としようとしていたし、<sup>(61)</sup> 現場ではその意を汲んで『中國之命運』を読みレポートを提出することが卒業審査の要件とされていた。<sup>(62)</sup>

『中國之命運』は國外でもある程度注目されていたようで、『中央日報』の報道によると日本語版、マレー語版、ベトナム語版、が刊行されたという。<sup>(63)</sup>

日本語版については、「日本の作家の波多野が『中國之命運』を翻譯して日本語版を作成した。發行以來、わずか三週間で七萬部を賣り上げ、日本で最も賣れ行きのよい書籍となっている」と『中央日報』は傳えている。<sup>(64)</sup>

波多野とは中國研究者として戦前から活躍していた波多野乾一であり、日本語版とは増訂版に基づき一九四六年二月に日本評論社から日華叢書の一冊として譯出・刊行された『中國の命運』を指している。日華叢書は日華學藝懇話會なる團體が中心となり設けられたもので、『中國の命運』のほかにも孫文『三民主義』（沈觀鼎譯、一九四七年）、毛澤東選集 上卷』（日華學藝懇話會譯編、一九四七年）などが刊行されている。

日華學藝懇話會は「〔日華〕兩國民の相互理解及び相互信頼を通じて日華關係を正常化しようとする熱意によつて結ばれた民間文化人の集り」であり、一九四五年早春に東京で成立、終戦後も毎週研究會を開くなど活潑な活動を展開し、平野義太郎、風早八十二、上田辰之助を世話人としていた。『毛澤東選集』の刊行や世話人の顔ぶれを考慮すると、<sup>(65)</sup> 親國民黨・親蔣介石の立場をとっていた團體とは考えにくく、『中國の命運』刊行も自主的になされた可能性が高いと推測され

る。

マレー語版は、梁友蘭というインドネシア華人によって翻譯がなされたものである。彼が編集に携わっていたジャカルタの雑誌『新報』は、マレー語版の刊行後、『中國之命運』を孫文の遺志を繼承した著作であるとして高く評價していた。<sup>(66)</sup> 梁友蘭はこれ以前からジャカルタの記者として活躍し、彼の據る『新報』は現地の華人社會では親中國の言論を展開することで知られていた。<sup>(67)</sup> こうした背景をもつ人物が擔ったマレー語版刊行については、國民黨が何らかの關與をしていた可能性も想定できよう。

ベトナム語版については、ベトナム民主共和國國家主席であったホー・チ・ミンが翻譯し、「中國最高領袖蔣介石手著中國之命運胡志明敬譯」との漢文題字が附され、ベトナム各地の大型書店で發賣、ベトナム人が争って買い求めていると『中央日報』は報道している。<sup>(68)</sup> 同じ記事では、蔣介石『三民主義之體系及其實行程序』をベトナム國民黨宣傳部がベトナム語に翻譯したとの内容も傳えている。ベトナム國民黨は元々中國國民黨の影響を受けて成立しており、當時はホー・チ・ミン率いるベトミンとともに政權運営を擔當していた。<sup>(69)</sup> またホー・チ・ミンも日本に對する武装闘争を展開していた際、蔣介石に協力を求めたことがあった。<sup>(70)</sup> したがって中國國民黨とホー・チ・ミンとの間には一定の關係があったのであり、『中國之命運』ベトナム語版刊行にも國民黨が何らかの關與をしていた可能性が存在するだろう。

以上、日本語版、マレー語版、ベトナム語版の刊行について紹介したが、『中央日報』の傳える狀況が正確であるのかどうか不明な點も多い。「日本でも最も賣れ行きのよい書籍」というのは明らかな誇張であり、ベトナムでも事態は同様であったと推測される。また、日本語版とベトナム語版の刊行を受けて現地で歓迎されている様子を傳え、さらにマレー語版刊行に對しても好意的な報道を行っているものの、いずれについても續報は見られない。これは後述する英語版刊行の際に關聯報道が多數なされたことと比較すると、きわめて簡単な反應である。『中央日報』としては蔣介石の著作が國外で受け容れられていると傳え、蔣介石の權威を國內で高められればそれで十分であったのだろう。

しかし國內外に『中國之命運』、ひいては蔣介石の權威を知らしめるといふこの對應は、大きな壁にぶつかることになる。それは、いったんは頓挫した英語版刊行をめぐる生じた。

(二) 二つの英語版

浦薛鳳によると、抗日戦争勝利後、王寵恵がアメリカから重慶に歸國すると英語版刊行の話が再び持ち上がった。そして浦薛鳳が保管していた譯稿を参照しつつ、一九四七年にアメリカで刊行できるよう準備が進んだようである。だが、そのように事態が推移したのは、浦薛鳳の説明ではアメリカの「左翼作家」による英語版刊行の廣告が出現したことも大きく関係していたようである。「左翼作家」による勝手な翻譯が刊行されれば多くの誤解が蔓延する、それを防ぐために公的な英語版刊行がようやく實現する運びとなったのである。<sup>(21)</sup>

一九四七年一月一日、『中央日報』は『中國之命運』英語版が、王寵恵による翻譯によって二月に刊行されることになったと報道している。<sup>(22)</sup> ほぼ二週間後、『中央日報』は『中國之命運』がアメリカにおいて、長く論争の焦點となつていくことも傳えている。<sup>(23)</sup> 記事によると、一九四三年三月の刊行以來、『中國之命運』中國語版は、ニューヨークのチャイナタウンで自由に販賣されており、アメリカの複数の人士がそれに基づき不當で不公平な解釋を行っていた。「論争」とはつまり、國民黨の側から見た問題ある解釋を指しているのだろう。そして王寵恵による英語版の刊行によって、この種の解釋を徹底して退けたいという願望も、『中央日報』の記事からは透けて見える。

一月一三日の記事はもう一つの情報を傳えている。それはニューヨークのロイ出版社が、『中國之命運』の英語版をやはり刊行するというものである。記事によると、ロイ版 (Chiang Kai-shek, *China's Destiny and Chinese Economic Theory*, New York: Roy Publishers, 1947) は「左傾雜誌」である『アメラジア』 (Amenasia) の編集者フィリップ・ジャッフェ (Philip Jaffe) の手になるものであり、浦薛鳳の言う「左翼作家」はジャッフェのことである。この記事はジャッフェが一九四四

年に生じた國務省のスパイ事件と関係があるとも指摘して、ジャップエが問題の多い人物であることを強調しており、そのような人物によるロイ版の刊行を明らかに歓迎していない。<sup>(74)</sup>

ロイ版に對する警戒は、ニューヨーク總領事張平群による聲明となつてあらわれた。張平群は「マクミランの翻譯本のみが正式な校訂を経たものであつて、そのほかの譯本はすべて著者の同意を得ていないものである。だから讀者は誤つた記述や〔中國語原著に〕忠實ではない箇所を注意してもらいたい」と述べている。「マクミランの翻譯本」とは、ニューヨークの出版社マクミランから刊行されることになつていた王寵惠による英語版を指す。また、『中國之命運』とともにロイ版に蔣介石の著作として収録されていた『中國經濟學說』については、蔣介石がある研究團體との討論の場で講述した「中國經濟思想進展大綱」に關する「私人による記録」に過ぎず、「單なる參考資料であつて公開されたことはなく、そのほかの譯本にも掲載されていない」と述べている。公刊されたことのない著述を勝手に収録する點でもロイ版には問題があると張平群は糾弾したのである。<sup>(75)</sup>

『中央日報』も複数回にわたつて、ロイ版の批判記事を掲載している。たとえば、オハイオ州の新聞の記事に依據して、ロイ出版社が亡命ポーランド人夫婦が一九四三年に始めたばかりの小出版社であるのに對し、マクミランは歴史と信用ある出版社であること、ジャップエはスパイ容疑で罰金を科せられたことを傳えている。<sup>(76)</sup>

『中央日報』がオハイオ州の新聞に依據するなどアメリカ國內のかなり細かな事情にも目配りして報道を展開したのは、アメリカにおいて活動する中國新聞社の情報を利用できたためであらう。中國新聞社は一九四〇年から一九四六年まで中央宣傳部駐米代表を務めた夏晉麟が、中國政府に關するニュースを傳えることを目的にニューヨークに開設したもので、國民黨の對米宣傳工作を擔う機關であつた。<sup>(77)</sup>

中國新聞社は、ロイ版が著者の許可を得ずに刊行されており道德的に問題があること、自らは中國語を解さない偏見に満ちた政治評論家ジャップエが極度に歪曲した内容を盛り込んでいると指摘して、警戒感をあらわにしている。また『中

『國經濟學說』なる書籍は中國では刊行されていないこと、それにもかかわらずそれを勝手に翻譯・刊行するのは政治的意圖があつたことだろうと論難している。<sup>(78)</sup> こうした聲明を中國新聞社はアメリカ人向けに出して、ロイ版の權威を失墜させることを狙つたのである。

### (三) マクミラン版の特徴

前述したように、國民黨側はロイ版の批判に注力するばかりではなく、公認の版として、マクミラン版 (*China's Destiny*, New York: The Macmillan Company, 1947) を準備・刊行した。ここではその特徴を確認しておこう。

マクミラン版は、孫文『三民主義』の翻譯者であり蔣介石の著述の翻譯にも携わつた実績をもつプライスの助力を受けつつ、増訂版に基づいて王寵恵が翻譯した。

書籍の體裁についてだが、マクミラン版には附録が設けられており、初版と増訂版との異同を詳細に示している。これは中國語増訂版にも、そのほかの中國語による關聯記事にもなかつた工夫であり、書籍としてはかなり丁寧な作りとなつてゐる。<sup>(80)</sup> また、"Authorized translation by Wang Chung-Hui, Ph. D. (Yale)"、"Former Judge of the Permanent Court of International Justice"と、マクミラン版が「公認された翻譯」であること、王寵恵が國際司法裁判所判事を務めた経歴をもつことを書籍の冒頭で明記している。公認されているのはマクミラン版のみであることを強調すると同時に、英語版の刊行が企圖された當初同様、王寵恵の聲望を『中國之命運』本體の權威付けに役立てようとしているかのようである。

さらに、アメリカでも著名であつた文學者・評論家である林語堂が、序文を寄せている。林語堂は『中國之命運』の内容を紹介するなかで、『中國之命運』が不平等條約について記述していることにも觸れてはいるが、きわめて簡単な言及にとどまつている。そのため、この序文が、國民黨や英米當局が抱いたような『中國之命運』への懸念を生じさせることはまずなかつたであろう。むしろこの序文は、『中國之命運』の主旨が、中國が近代的で民主的な國家へと發展していく

こと、そして新しい世界組織すなわち國際聯合への貢獻を果たしていくことにあると整理しており、蔣介石の立場が英米に十分に合致していると強調するものであった。

だが後述するように、鋭敏な英語圏の讀者は、林語堂による紹介が『中國之命運』の全體像を正確には示していないと氣づいており、マクミラン版の試みは功を奏さなかった。

#### (四) ロイ版刊行の中心人物

ロイ版はすでに述べたように、ジャツフェが國民黨・國民政府の許可をまったく得ずに刊行したものである。ジャツフェは實業家として活動した人物だが、アメリカの共產主義者が多く寄稿した雑誌『アメラジア』の編集者も務め、アメリカ共產黨と非常に近い關係を有してもいた。一九三七年にはラティモアらと延安を訪問し、毛澤東や朱徳と面會もしている。

ジャツフェが中國と浅からぬ縁をもつにいたつたのは、従姉妹であるハリエット・レヴィン (Hariett Levine) が一九二九年に冀朝鼎の妻になったためである。この結婚によって、ジャツフェと冀朝鼎は知り合うこととなった。一九三三年には冀朝鼎の依頼により、ジャツフェはアメリカ在住の中國人團體の一つである American Friends of Chinese People の結成大會に参加し、その書記に就任している。この組織は、アメリカ共產黨と密接な關係をもつことで知られていた。

冀朝鼎はジャツフェとともに一九三三年から一九三六年まで *China Today* の編集に、一九三七年から中國に歸國する一九四一年初頭までは『アメラジア』の編集に協力しており、多くの文章を執筆している。なお、歸國後は國民政府の役職を歴任しているが、實際には中國共產黨祕密黨員として活動している。ジャツフェは冀朝鼎を「我々の政治的ガイド」であり、アメリカの共產主義者のサークルにおける「能力あるマルクス主義の理論家にして、中國共產主義の大義の卓越した宣傳家」と評していた。<sup>8)</sup> ジャツフェは冀朝鼎およびその人脈から多くの知識を吸収し、『アメラジア』の編集やロイ

版刊行に役立てたのだろう。

(五) ロイ版の特徴

すでに述べたように、ロイ版は『中國之命運』のみならず『中國經濟學說』を収録している。『中國之命運』も『中國經濟學說』も、實際の翻譯はジャップフェではなく二人の中國人研究者が翻譯を行い、相互にそれぞれの翻譯を點檢するという形式で進めたとのことである。

ロイ版は基本的に中國語版の意圖を正確に伝えていけると言える。また各所に注釋が附され、中國語初版と増訂版の異同を示している。加えて、中國の文化や歴史に不案内な英語圏の讀者のための解説も、注釋では施されている。<sup>(82)</sup> 翻譯書として、大變に丁寧な作りであると言えるだろう。

ただし、『中國之命運』に對する批判的注釋が多數なされていることにも注意が必要である。たとえば、一九二〇年代初頭の國民黨の再編とその成功に關する記述において、中國共產黨の貢獻に觸れていないこと、<sup>(83)</sup> また蔣介石が大きく關わったはずの中山艦事件について言及がないことに、ジャップフェは不滿を示している。<sup>(84)</sup>

ところで、ロイ版に収録された『中國經濟學說』は『中國之命運』と異なり、中國國外はもちろん國內においてすらも大々的に宣傳された著作ではない。したがって、それほど知名度の高い著作ではなかったはずだが、ロイ版はこの知られざる著作をわざわざ収録した。その一つの理由は、『アメラジア』がすでに『中國經濟學說』の翻譯を公表していたためである。

『アメラジア』は一九四六年一月號に、『中國經濟學說』全文の英譯を、紹介文と詳細なコメント付きで掲載している。<sup>(85)</sup> コメントによると『中國經濟學說』は軍事委員會委員長侍從室の名義で刊行され、國民黨中央政治學校でテキストとして使用されたものの、中國國內ではほとんど流通しなかった。著者は蔣介石ということになっているが、實際に大部分を執

筆したのは陶希聖であり、マルクス主義經濟學に造詣の深かった陳豹隱（陳啓修）が、西洋經濟學に關する史料を提供したとしている。

『アメラジア』が『中國經濟學說』に着目したのは、一九四五年一月二六日の最高經濟會議において、蔣介石が同書を「中國經濟建設の總指針」と認定したこと、つまり今後の中國經濟政策を擔う人々の基本觀念を規定すると考えられたためである。<sup>(86)</sup>そして、『アメラジア』のコメントによると『中國經濟學說』は、民間企業が強權的政府の統制に服するよう求め、勞働力や兵力を確保するべく保甲制の導入を提唱するが、こうしたやり方は國民黨が表向き掲げている民主的政治とは相容れず、實際には過去の封建・皇帝時代に見られた獨裁的地主・貴族政治に類似している。また、中國古代文明と西洋文明を對比し、前者の優越を強調する點で、『中國經濟學說』は非常に排外主義的性格が強い。このような考え方が基調となって中國の今後の經濟運営がなされるならば、「中國經濟は戦前の日本の經濟機構の複製版となってしまふのみであろう」との判断をコメントは下した。<sup>(87)</sup>ロイ版刊行を待つまでもなく、ジャップフェが主導する『アメラジア』は、蔣介石の著作に極めて冷淡な評價を與えていると言えるだろう。

なお、先行して『アメラジア』に掲載されていた『中國經濟學說』英語版の形式を踏襲して、ロイ版にもジャップフェによる序文とコメントが附されている。この序文とコメントは、單に二つの著作を讀んだだけでは決して知ることのできな周邊情報にも少なからず觸れている。たとえば、『中國之命運』の著者が陶希聖であること、彼がかつて汪精衛と深く關係したため多くの中國人は彼を「大變な裏切り者」と見なしているが、蔣介石は彼を文化・言論政策の責任者の一人として重用していることに言及している。<sup>(88)</sup>英語譯もされていた陳伯達「評『中國之命運』」に代表される中國語の文献を參照しつつ、American Friends of Chinese Peopleなどの活動を通じ知り合ったであろう中國人からも多くの情報を得て、序文とコメントを準備したのであろう。

この序文とコメントでジャップフェは、これまでの議論から容易に想像されるように、蔣介石に對し「封建的」、「反民主



的」であるとの非常に厳しい批判を展開している。<sup>(89)</sup>そしてその際、ナチスやヒトラーについて、しばしば言及がなされることが目を引く。たとえば、國民政府成立以降になされた弾壓は、ヒトラーによる自由主義、知識人の自由、労働者組織の破壊に次ぐ規模のものであったと糾弾されている。さらに、『中國之命運』において、今後の中國の發展のために大きな役割を擔うよう期待を集めている三民主義青年團について、中國におけるヒトラー・ユーゲントであるとも指摘している。以上をふまえ、『中國之命運』は、中國における『わが鬭争』なのであるとの辛辣な評價をジャッフェは下したのだった。

またマクミラン版に序文を寄せた林語堂に對しても、彼が序文を書くことをあらかじめ豫期していたかのように手厳しい批判を展開した。ジャッフェは『中國之命運』英語版が長らく刊行されなかった一つの要因として、林語堂の *The Vigil of a Nation* (1944) が刊行されたことがあったのではないかとの推論を示している。同書は中國共產黨に酷評を加えており、また中國の試練や艱難の原因をすべて西洋に歸し、儒教に由來する中國の傳統的價値の維持を訴える點で、ジャッフェの見るところ『中國之命運』の「十分な代替物」にふさわしい書籍であった。<sup>(90)</sup>

以上の諸點から見て取れるように、ロイ版刊行には相當の手間暇がかけられていたはずだが、それはジャッフェにかなり明確な目標があったからであろう。ジャッフェによると、一九四六年一月、一部の聯邦議會議員が『中國之命運』英譯版の公開を要求したのに對し、國務省がそれを「トップシークレット」であるとの理由で拒否した。ジャッフェの推測では、それは同書が不平等條約を糾弾し、さらには反民主的な視點と西洋の自由主義への反對を明示していること、そしてそのために、アメリカ國內での反撥を招き、蒋介石への援助が不可能となってしまうためだった。<sup>(91)</sup>

實際のところ、ロイ版刊行の時點にあつては、トルーマン率いるアメリカ政府の蒋介石に對する態度は、すでにきわめて冷淡であつた。しかし、フランクリン・ローズヴェルトはもちろん、その後を繼承したトルーマンも、蒋介石を當初は援助していた。ジャッフェとしては、こうした状況を憂慮するなかで、アメリカ政府の親蒋介石の姿勢を改めさせるべく、

『中國之命運』刊行を進めていたのだろう。

(六) 書評の出現

ほぼ同時に世に出たマクミラン版とロイ版は、刊行日をめぐり両者が激しい競争を繰り広げたこともあって注目を集め、複数の新聞・雑誌に書評が発表された。

それらは、概ね蔣介石に批判的な論調で占められていたようである。たとえば、ニューヨークの有力紙『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のルイス・ガネット (Lewis Gannett) はジャツフェの主張を受け容れ、『中國之命運』を中國版『わが鬭争』と評價するのは基本的に正確であると述べていたようである。<sup>(92)</sup> また、『ニューヨーク・タイムズ』の著名な書評家であったオーヴィル・プレスコット (Orville Prescott) は、蔣介石『中國之命運』の内容には、中國古代の中央集権あるいは近代化された獨裁政治と符合する点が多く、いずれにせよおそ民主的ではないと結論づけていた。<sup>(93)</sup>

これら辛口なものより冷静な書評として、中國史の専門家であるフェアバンクによるものがある。<sup>(94)</sup> フェアバンクの書評は、中國語原著およびロイ版とマクミラン版について、客観的な觀點に立つて冷静に比較検討しており、たとえばロイ版にはいくつかの文を譯していないという問題があること、マクミラン版は中國語原著の論調を弱めている部分があることを指摘している。また、ロイ版が『中國之命運』を中國版『わが鬭争』と呼稱するのは、あまりに誇張が過ぎるとの不满も示している。

とはいえ、フェアバンクも『中國之命運』から看取される蔣介石の立場に對して、基本的には非常に批判的であった。フェアバンクの見るところ、蔣介石『中國之命運』は「西洋の個人主義に抵抗して、國家への愛國的服従、そして國民黨とその指導者への愛國的支援を求め」、人類の利益よりも國家の強大さを重視しているが、それは「大きな悲劇」であり「アメリカのデモクラシーにとっても危険である」というのがその理由であった。

二つの英語版がほぼ同時期に刊行され、それらに複数の批判的な書評が発表されたことは、最終的には蒋介石に大きな打撃を與えた。ある評論は、『ニューヨーク・タイムズ』は元々は國民黨に對して好感を表明するだけでなく、しばしば同黨を支援する記事を掲載していたのだが、その『ニューヨーク・タイムズ』がプレスコットによる辛口書評を容認した點に、蒋介石の權威の失墜を見て取れると指摘している。<sup>(96)</sup>

おわりに

『中國之命運』が中國國內で實際にどれほど支持されていたのかを確認するのは容易ではない。だが、このうち蒋介石が毛澤東に敗北し臺灣に逃れることになったという周知の事實を考慮すると、廣範に流通していたにもかかわらず、『中國之命運』が民衆に十分に浸透していたとは言えないのではないか。また、大規模な宣傳が、民衆の『中國之命運』に對する自發的な支持をどれほど引き出したのかについても疑問が残る。<sup>(97)</sup>

『中國之命運』は國際的には、刊行直後、英米などの大使館、『アメリカ』、一部の中國専門家のみが注目するごく限られた範圍にしか知られていない著作であった。だが、ジャッフェによるロイ版の刊行が状況を大きく變えた。國民黨側はマクミラン版を刊行する一方、ロイ版に激しい批判を加えたが、このことが『中國之命運』の知名度を悪い意味で急上昇させてしまった。結果として、蒋介石のアメリカにおける聲望は大きく傷つき、彼がアメリカからの支援を獲得するのに大いに妨げたと見えるだろう。そのためもあってか、『中國之命運』が國民黨や蒋介石の手により國際社會において大々的に宣傳されることはもはやなくなり、同書がかつて有していた存在感も發揮されることはなくなったのだ<sup>(98)</sup>。

## 註

(1) 王震邦「閲讀『中國之命運』」黃自進編『國共關係與中日戰爭』稻鄉出版社、二〇一六年、四三九―五二四頁。な

- お、中國共產黨の反應に關しては次の研究が參考になる。
- (1) 鄧野「蔣介石關於『中國之命運』的命題與國共的兩個口號」『歷史研究』二〇〇八年第四期、八四—九八頁。
- (2) 『中國之命運』についてはソ聯も注意していたようだが、本稿では検討の對象としない。日本も一定の反應を示しており興味深い検討課題だが、紙幅の都合上、本稿では簡単に觸れるにとどめる。
- (3) 王震邦はフェアバンクスら一部人士の反應に觸れてはいるが、二冊の英語版をめぐる問題は議論しないなど英米の反應の分析としては不十分である。また、次の研究はアメリカでの反響に觸れる點で貴重だが、二冊の英語版にはいなく簡単に言及するのみで、物足りなさが残る。Daniel D. Knorr, "Debating *China's Destiny*: Writing the Nation's Past and Future in Wartime China," in Joseph W. Eschrick and Mathew Combs, eds. *1943: China at the Crossroads*. Ithaca: Cornell University Press, 2015. pp. 168-202. なお、拙稿「蔣介石と『中國之命運』」(京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター編『中國近代の巨人とその著作』京大人文研漢籍セミナー八) 研文出版、二〇一九年、五五—九〇頁) では、『中國之命運』に關係する基本的事實とともに二冊の英語版も取り上げたが、紙幅の都合もあり多くの點に言及できなかった。本稿は拙稿の内容をふまえて、より詳細な議論を展開するものである。
- (4) 王震邦「閱讀『中國之命運』」四四四—四四六頁。
- (5) ただし、刊行直前になって三月一〇日に前倒しされてい
- (6) 國民精神總動員運動については次の研究を参照。谷小水「抗戰時期的國民精神總動員運動」『抗日戰爭研究』二〇〇四年第一期、四五—六〇頁。
- (7) 『中央日報』は、國民精神總動員を進める上で、『中國之命運』を参照せよと呼びかけている。「社論 精神改造與風氣改造——紀念國民精神總動員四周年」『中央日報』一九四三年三月二日。
- (8) 抗戰時期における陳立夫の教育政策への關わりについては、次に詳しい。張珊珍「陳立夫與抗戰時期的中國教育」『抗日戰爭研究』二〇〇六年第三期、九〇—一〇〇頁。
- (9) 陳立夫は董事長、副董事長を経て、一九四三年から一九五〇年まで再び董事長を務めており、正中書局との關係は深かった。郭曉梅「臺灣圖書出版業之變遷探討——以正中書局爲例」世新大學傳播研究所碩士論文、二〇〇二年、五一—九〇頁。
- (10) 『中國之命運』のより詳細な構成および内容紹介に關しては、拙稿「蔣介石と『中國之命運』」を参照。
- (11) 蔣中正「中國之命運」正中書局、一九四三年、七三頁。
- (12) 「社論 『中國之命運』」『中央日報』一九四三年二月一日。
- (13) 「社論 讀『中國之命運』」『中央日報』一九四三年三月一日。
- (14) 「中國之命運」各界爭以先睹爲快、陪都預約者十萬人」『中央日報』一九四三年三月二日。

- (15) 「陷區民衆争議『中國之命運』廣州每本售五百元」『中央日報』一九四三年七月二日。
- (16) 陶希聖「讀『中國之命運』」『中央週刊』第五卷第三期、一九四三年四月一日。
- (17) 張治中「讀『中國之命運』」『中央週刊』第五卷第三期、一九四三年三月二十五日。
- (18) 劉偉森編『中國之命運』研究 大道文化事業公司、一九四三年八月。「讀『中國之命運』」中國文化服務社北平分社、一九四五年二月。
- (19) 「教育部訓令第一八一二號」『教育部公報』第一五卷第四期、一九四三年四月二日、二頁。
- (20) 王震邦「閱讀『中國之命運』」四五四頁。
- (21) 「王校長講解『中國之命運』」『大夏週報』第一九卷第一期、一九四三年七月一日。「大夏週報」は上海の大夏大學で刊行されていた雑誌であり、學内の情報を多く掲載している。
- (22) 「青年團分團部舉行『中國之命運』測驗」『大夏週報』第一九卷第二期、一九四三年七月一日。
- (23) もちろん各機關による印刷・刊行は中央宣傳部の厳しい監督下に置かれており、印刷完了後に中央宣傳部の検査を受けるといった条件を満たすよう強く求められていた點には注意が必要である。「各機關團體仿印『中國之命運』辦法(卅二年中央宣傳部製訂)」『出版通訊』第二卷第二期、一九四三年六月。
- (24) 「『中國之命運』豫報專欄登載」『中央日報』一九四三年五月二日。
- (25) なお教育現場はもちろん、軍や國民黨でも『中國之命運』を読むことが義務づけられていた。王震邦「閱讀『中國之命運』」四七八―四八四頁。
- (26) 陶希聖『潮流與點滴』傳記出版社、一九六四年、一三〇頁。後述するように、陶希聖は『中國之命運』の實質的著者であり、そうした人物による數字には誇張が含まれている可能性が高い。だが、本當に賣り上げられたものであるかどうかはともかく、短期間で數十萬部が流通したのは確かであろう。
- (27) J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref: C13032346500 「蔣の著作各國語に翻譯 重慶英放 昭和一八年二月五日」(防衛省防衛研究所)。なおチベットでは、『西藏國民日報』が『中國之命運』のチベット語譯に着手してそれを同紙に連載し、いずれは書籍としても刊行する準備が進められていたとのことである。「『中國之命運』將譯成藏文」『中央日報』一九四三年五月二十九日。
- (28) 「蔣委員長手著『中國之命運』提早兩日發行」『中央日報』一九四三年三月六日。
- (29) 「『中國之命運』摘要」『陸軍經理雜誌』第五卷第四期、一九四三年四月一日、一五頁。
- (30) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref: C13032347100 「蔣介石近著『中國の運命』 重慶英放 昭和一八年三月三日」(防衛省防衛研究所)。
- (31) 浦薛鳳『浦薛鳳回憶錄』中冊、黃山書社、二〇〇九年、

- 一九九二〇一頁。
- (32) 『解放日報』に掲載された『中國之命運』關聯の記事として、次のようなものがある。何幹之「命運二種」一九四三年七月二日、范文瀾「誰革命？革誰的命？」一九四三年八月一日、呂振羽「國共兩黨與中國之命運——蔣著『中國之命運』」一九四三年八月七日、蕭三「向國民黨緊急動議兩件事——爲了國家民族爲了青年後代」一九四三年九月八日、紹萱「中國法西斯主義之命運」一九四三年九月三日、艾思奇「中國之命運——極端唯心論的愚民哲學」一九四三年八月一日、齊燕銘「駁蔣介石的文化觀」一九四三年八月九日。
- (33) 四月の時點で毛澤東は『中國之命運』を入手していたが、その後しばらくの間はどのような對應をするべきか考慮していたようである。鄧野「蔣介石關於『中國之命運』的命題與國共的兩個口號」九五頁。
- (34) 陳曉農編『陳伯達——最後口述回憶』星克爾、二〇一三年、七〇頁。
- (35) 同上。
- (36) 陳伯達「評『中國之命運』」『解放日報』一九四三年七月二一日。
- (37) 實際には校正ではなく、過半を執筆した。ただし、蔣介石は陶希聖の原稿を仔細に點檢し、多くの修正を施している。王震邦「閱讀『中國之命運』」四四八—四五一頁。
- (38) 中共中央文獻研究室編『關於公布「評『中國之命運』」一文』『毛澤東文集』第三卷、人民出版社、一九九六年、四九五—五〇頁。これは毛澤東から、南方局副書記兼宣傳部部長であった董必武に對し、一九四三年七月二一日に出された文書である。「關於審幹的九條方針和在敵後的八項政策」『毛澤東文集』第三卷、五二—五三頁。これは毛澤東から、北方局代理書記・八路軍副總司令であった彭德懷に對し、一九四三年七月三〇日に出された文書である。整風の徹底や幹部審查方針の詳細などと竝んで、「評『中國之命運』」や范文瀾「誰革命？革誰的命？」などを廣く頒布し、さらなる階級教育の實施につなげるよう求めている。
- (39) Chen Pat-ta, "Critique of Chiang Kai-shek's Book: 'China's Destiny', The Communist, Vol. XXIII, No. 1 (Jan. 1944).
- (40) ちなみに、蔣介石は一九四三年一〇月の時點できわめて熱心に「評『中國之命運』」を読み込んでいたが、陳伯達による酷評に意氣消沈することはなく、『中國之命運』の重要性をかえって強く確信したのだった。王震邦「閱讀『中國之命運』」五一〇—五一頁。
- (41) 『王世杰日記』一九四三年三月三〇日（王世杰著、林美莉編輯校訂『王世杰日記』上冊、中央研究院近代史研究所、二〇一二年、四九七—四九八頁）。
- (42) 同、一九四三年四月九日、四九九頁。王世杰は五月三日の日記において、『中國之命運』を最初に讀んだ際、それが英米の「過去の惡を究明する」、英米に對する「かつての恨みを念頭に置く」という意味合いを免れていないと感じたが、再讀した際にはそのようには思わなかったとしてい

- る。そして、こうした新たな讀後感を蔣介石に書面で提出したこと、再版の際は生じうる誤解を防ぐために短い序文を附して欲しいとの希望を日記に書き附けている。一見すると、王世杰の憂慮がかなりの程度消えたことを窺わせる記述だが、實態はそうではないだろう。王世杰が書面を提出したのは蔣介石の求めに應じてのことであり、新たな讀後感は、心からのものというよりは、蔣介石に對する配慮から生じたものだと考えられる。また、誤解が生じうる可能性に言及している點からは、王世杰が依然として『中國之命運』の内容に懸念を抱いていることが讀み取れる。王世杰著、林美莉編輯校訂『王世杰日記』上册、五〇四頁。
- (43) 浦薛鳳『浦薛鳳回憶錄』中冊、二〇二頁。
- (44) 同上。
- (45) WO 371/35814, British Embassy, Chungking to Far Eastern Department, Foreign Office, No. 825, Aug. 23, 1943.
- (46) 浦薛鳳『浦薛鳳回憶錄』中冊、二〇三頁。このことはオーウェン・ラティモアの回想によっても裏附けられる。アメリカの中國研究者で、蔣介石の顧問を務めた経験もつラティモアによると、一九四四年に重慶を訪問し、宋美齡と面會した際、彼女は『中國之命運』のアメリカでの反響を尋ね、「この著書をアメリカで普及させることには反對したのだが」と述べたとのことである（磯野富士子編譯『ラティモア 中國と私』みずす書房、一九九二年、二一九頁）。ただし、陶希聖の回想はこれとはまったく異なっている。宋美齡は『中國之命運』中國語版刊行以降、アメリカで同書に對する歪曲が生じているので、早急に英語版を刊行するよう勸告したとのことである。陶泰來・陶晉生『陶希聖年表』聯經出版事業公司、二〇一七年、二〇一頁。宋美齡がそのように勸告した可能性は否定できないが、アメリカの事情に通じる宋美齡が、浦薛鳳の傳える憂慮を抱いていたこともまた確かであったと考えられる。
- (47) FO371/35813, H Seymour, Ambassador in Chungking to FO, No. 449, May. 1, 1943; WO 208/182, H Seymour, Ambassador in Chungking to FO, No. 825, Aug. 3, 1943.
- (48) FO371/35813, Ministry of Information to Far Eastern Department, Foreign Office, Apr. 27, 1943.
- (49) FO371/35813, H Seymour, Ambassador in Chungking to FO, No. 386, Apr. 21, 1943.
- (50) The Charge in China (Atcheson) to the Secretary of State, Chungking, No. 1220, May 31, 1943, *Foreign Relations of the United States: Diplomatic Papers, 1943, China*, Washington, D. C.: United States Government Printing Office, 1957, pp. 244-248.
- (51) 王震邦「閲讀『中國之命運』」五〇八—五二二頁。民族に關する記述の變更は第一章「中華民族的成長與發達」に見られ、増訂版では初版では採用されていなかった「中華民族同源論」の觀點が強調されている。詳細は次の研究を參照。婁貴品「陶希聖與『中國之命運』中的「中華民族」論述」『二十一世紀雙月刊』二〇二二年六月號、六五—七二

- 頁。
- (52) 小野寺史郎「解題『中國之命運』(抄)」野村浩一ほか編集『新編 原典 中國近代思想史』第六卷、岩波書店、二〇一一年、一六五頁。
- (53) 蔣中正『中國之命運』(増訂版) 正中書局、一九四四年、七四頁。
- (54) 『中國之命運』増訂版元旦出版』『中央日報』一九四三年一月二日。
- (55) まったく存在しなかったわけではなく、増訂された箇所を紹介しつつ『中國之命運』を稱揚する文章も見られた。澄性『『中國之命運』増訂點之介紹與認識』『安徽青年』第四卷第一・二期合刊、一九四四年三月三〇日。しかし、こうした文章はそれほど多くはなく、初版刊行時のような熱狂的宣傳はなされなかったと言える。
- (56) 筆者が確認したのは、次の版である。『中國之命運』三民主義青年團平津支團部、一九四六年。
- (57) 陳謙平「開羅會議與戰後東亞國際秩序的重構」『近代史研究』二〇一三年第六期、三四一―三八頁。
- (58) 陶泰來・陶晉生『陶希聖年表』一九七頁。
- (59) 同、二〇〇頁。蔣介石がブライースと會見したのは五月二三日のことである。王震邦「閲讀『中國之命運』」五〇九頁。
- (60) 一九四三、四四年とは異なり一九五六年の時點にあつては、国内向けの版本として初版に準據したところで、國際的に影響をおよぼすことはないとの想定もあったのかも。
- (61) 「檢閱平市青年學生蔣主席勉北方子弟」『中央日報』一九四五年一月一七日。
- (62) 「收復區專科以上學校畢業生甄審辦法」『中央日報』一九四六年一月三日。教育部による「收復區專科以上學校畢業生甄審辦法」による。
- (63) なお、英語版も刊行されている。これは北京大學法學士 Wang Sheng-chih なる人物が翻譯・刊行したもので、印刷はシンガポールの Choon Kee Press によってなされている。書名は *The Destiny of China* となっており、後述する二つの英語版とは文體が異なっている。イギリス當局が留意はしたものの、この版は特に注目を集めず、ほとんど何らの影響も及ぼさなかったようである。FO371/53722. R. H. Scott, Office of Special Commissioner in South East Asia, to British Embassy, Nanking, Aug. 27, 1946.
- (64) 『中國之命運』暢銷日本』『中央日報』一九四六年四月一日。
- (65) なお、平野、風早、上田の三人は、一九四六年に創設された民主主義科學者協會に参加している。
- (66) 『中國之命運』譯成馬來文』『中央日報』一九四六年五月一日。
- (67) Leo Suryadinata, *Prominent Indonesian Chinese* :



- Biographical Sketches*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2015, pp. 184-188; 張憲文主編『中華民國史大辭典』二〇〇二年、一八三三頁。
- (68) 越主席胡志明譯『中國之命運出版後極暢銷』『中央日報』一九四六年五月一九日。
- (69) 時殷弘「妥協的必要和極限——論一九四五年九月至一九四六年二月的越盟外交」『暨南學報』（哲學社會科學）一九九一年第一期、五五—六頁。羅敏「戰後中國對越南政策的演變——以中國國民黨對越黨派工作爲中心的探討」『近代史研究』二〇〇二年第一期、八九—九〇頁。
- (70) 古田元夫『ホー・チ・ミン——民族解放とドイモイ』岩波書店、一九九六年、一〇八頁。
- (71) 『浦薛鳳回憶錄』中冊、二〇三頁。
- (72) 『中國之命運』英譯本下月中旬在美出版』『中央日報』一九四七年一月二三日。
- (73) 蔣主席著『中國之命運』在美發現不同譯本』『中央日報』一九四七年一月二八日。
- (74) このスパイ事件とは、『アメラジア』關係者が國務省などの機密文書を持ち出しソ聯に提供していたというもので、一九四五年六月にジャップフェらは逮捕されている。調査の過程で、ジャップフェらは確かに文書を持ち出したがそれは機密性の高いものではなく、またソ聯など外國に提供していたという證據も得られなかった。最終的には、ジャップフェは罪を認め罰金二五〇〇ドルを支拂うことで解決が圖られた。詳細は、次の研究を参照。Harvey Kleur and Ronald Radosh, *The Amerasia Spy Case: Prelude to McCarthyism*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996.
- (75) 就『中國之命運』譯本事張平群發表聲明僅麥克美蘭譯本爲核定本其它譯本均未經著者同意』『中央日報』一九四七年一月二九日。
- (76) 「美出版商未獲許可擅刊『中國之命運』美報認有違出版道德」『中央日報』一九四七年二月一七日。オハイオ州で最大の發行部數を誇るという『哥倫布獨立消息報』の記事を紹介するかたちで議論を展開している。『哥倫布獨立消息報』とは、オハイオ州の州都コロンバスで發行されていた *The Columbus Dispatch* である。
- (77) 中國新聞社については、次の研究を参照。程剛「抗戰時期國民黨國際宣傳處對外宣傳策略探析」『南方論刊』二〇一六年第六期、二五—七、三〇頁。
- (78) 書籍あるいはパンフレットとして、中央訓練團によるものなどいくつかの版が存在し、『總裁言論』（杭州）、『訓練與服務』（貴陽）などいくつかの雑誌にも掲載されていた。ただし、『中國之命運』のように廣く流通させる意圖は存在していなかったと考えられる。
- (79) 蔣主席著『中國之命運』在美國發現不同譯本中國新聞社發表聲明』『中央日報』一九四七年一月二八日。
- (80) 初版と増訂版の異同について、説明がまったくなかったわけではない。増訂版見返しでは、第一章における加筆、第三章における新たな節の追加、第五章の農林建設に關す

- る記載における数値の追加などが説明されている。しかし、マクミラン版と比較するときわめて簡便なものである。
- (81) Song Yuwu, *Encyclopedia of Chinese-American Relations*, Jefferson : McFarland, 2009, pp. 148-149.
- (82) たゞ、その「宣言」がどのような存在であるのかについて詳細な解説や、英語への翻譯が容易ではないことや信じていた中國固有の概念に關する説明がなされてゐる。Chiang Kai-shek, *China's Destiny and Chinese Economic Theory*, New York : Roy Publishers, 1947, p. 40, 44.
- (83) Chiang Kai-shek, *China's Destiny and Chinese Economic Theory*, p. 108.
- (84) *Ibid.*, p. 117.
- (85) "Chiang Kai-shek's Economic Credo. A Zaijatsu China"; "Full Text of "Chinese Economic Theory" by Chiang Kai-shek"; "Commentary on "Chinese Economic Theory", *Amerasia*, Vol. 10, No. 1, Jan. 1946, pp. 3-36. なお、紹介文のプロメントは中國語にも翻譯やれてゐる。武明嘉譯「論中國經濟學說與美國在華投資」『國民』新五期、一九四六年五月二〇日。
- (86) "Chiang Kai-shek's Economic Credo: A Zaijatsu China", p. 5.
- (87) "Commentary on "Chinese Economic Theory", p. 36.
- (88) Chiang Kai-shek, *China's Destiny and Chinese Economic Theory*, p. 21.
- (89) *Ibid.*, p. 19.
- (90) *Ibid.*, p. 22.
- (91) *Ibid.*, pp. 18-19.
- (92) それらの書評については、「群衆」が紹介している。未名「中國之命運」在美國」第六期、一九四七年三月六日。『群衆』は中共中央の刊行物であり、『中國之命運』に對し否定的な書評はかりを紹介するのは當然ではある。ただ、『中央日報』など國民黨系の刊行物には、肯定的な論調の書評は紹介されていない。そうした書評が存在すれば、國民黨系刊行物は積極的に言及したはずだが、それが無いという事は、肯定的な書評がそもそも存在しなかつたのだらう。
- (93) 未名「中國之命運」在美國」八頁。
- (94) Orville Prescott, "Book of the Times", *The New York Times*, Jan. 28, 1947.
- (95) John King Fairbank, "Introducing a Skelton from the Kuomintang Closet", *The New York Times Book Review*, Feb. 9, 1947.
- (96) Edward Rohrbough, "Unexpurgated Version of Chiang's Book Wins Publishers' Battle" *The China Weekly Review*, Feb. 22, 1947.
- (97) もちろん、まったく支持されていないところを想像させる文章が散見される。たとえば、『中國之命運』が落花生の包み紙として使用されてゐるとどう事例や(阿淵「中國之命運」『寧光』第五期、一九四七年一月一日)、共產黨を支持する息子を心配した國民黨支持の父親が、息子に

『中國之命運』を手渡し讀むよう勧めたが、實はそれは陳伯達「評『中國之命運』」であつたという創作が見られた（丘天「『中國之命運』（短篇創作）『風下』第六五期、一九四七年三月八日）。後者の創作は、『中國之命運』つまり蔣介石を支持する側も、現實には同書の内容を何も理解していないことを揶揄する笑い話である。『寧光』は中國青年黨のメンバーが、『風下』は胡愈之が抗日戰爭終結後にシンガポールで創設し中國共產黨のための宣傳活動を行っていた新南洋出版社が刊行していた雑誌であり、いずれも國民黨とは距離を置く、あるいは敵對的な媒體である。そうした媒體が『中國之命運』に否定的評價を與えるのは當然とはいえ、そうした評價が一定の眞實味を有する狀況が存在していたことも事實であらう。

(98) もちろん國際的にはということであつて、臺灣においては完全に重みを失つたわけではない。一九五〇年代、蔣介石は臺灣を「三民主義模範省」とするべく措置を講じたが、『中國之命運』は『總理遺教六篇』、『反共抗俄基本論』、『民生主義育樂兩篇補述』などの著述とともに、「模範省」建設のための理論的根據とされた。この點については、次の研究に詳しい。陳紅民等『蔣介石の後半生』第六章第一節「建設模範省」的理論設計」浙江大學出版社、二〇一〇年。ただし、蔣介石・國民黨を取り巻く狀況が變化し、それに應じて『蘇俄在中國』（一九五六年）のような著作が新たに刊行されたためもあつて、『中國之命運』がかつてのような重みを有することはなかつたと考えられる。

\*本稿は科學研究費補助金（15H03251・17K13343）および公益財團法人三菱財團・人文科學研究助成（二〇一七年度）による成果の一部である。

civil war of 1920, Sun regarded Zhang, who had greater military power, as the most significant partner. Securing war funding from Zhang provided Sun the opportunity to exercise influence on the military and political situation in the north.

## THE INTERNATIONAL RESPONSE TO CHIANG KAI-SHEK'S *CHINA'S DESTINY*

MORIKAWA Hiroki

*China's Destiny*, published in March 1943, was regarded as an important work in China because the author, Chiang Kai-shek, as a national leader had a significant presence in the world. The contents and importance of the book were also widely touted. However, there were quite a few people in China who criticized Chiang, pointing out the “feudal” and “despotic” character of the book. Some went as far as deriding the book as the “*Mein Kampf* of China”.

Whether positive or negative, *China's Destiny* created a sensation as a work by the leader of China. Scholars have focused on the sensation it caused and have revealed many of the details of its domestic reception such as how the Chinese people, and particularly those associated with Kuomintang, responded to the book.

However, few studies have given sufficient attention to the international response elicited by *China's Destiny*. The book also created a sensation outside China, therefore, it is necessary as well to analyze international response to understand the comprehensive influence of the book. This article sheds light on the response of two important allies of China in 1943, the United Kingdom and the United States, and how two English-language versions of *China's Destiny*, published in 1947, were evaluated in the English-speaking world.

Authorities in both the UK and US expressed dissatisfaction with the contents of *China's Destiny*, because it attributed all the problems of China to the so-called unequal treaties. Because of this, the plan to publish an English version of the book met with a setback. After the end of the war with Japan, the American businessman Philip Jaffe published the English version of *China's Destiny* with detailed comments critical of Chiang's political stance. Jaffe had not secured permission from the KMT to publish, and thus the KMT vigorously criticized him and published an authorized edition of *China's Destiny* to counter Jaffe's edition. However, this KMT countermeasure allowed readers in the English-speaking world to clearly recognize the anti-American and anti-British character of the book, resulting in a severe blow to Chiang's reputation internationally.